淨名玄論について

村 中 祐 生

淨名玄論は嘉祥大師吉藏(598-633)の數多の著作の内、いわゆる玄論の呼稱をもつもの一つで、他の義疏・經疏・玄義等の呼稱の著述に比して總論的體系をもつとみなされている。

そこで先づ玄論たる法華玄論・大乘玄論との述作の順位について考察を加え、思想展開の一端をうかがつておきたい。淨名玄論にはその詳論を法華玄論の名を明記してゆずる個所が凡そ七所あり、その所論は容易に檢出しうる。これによつて法華玄論が先述とみなしうる。大乘玄論との關係は、凡そ三所において二論に重複の個所を見出す。なお、これを大乘玄論の本文相互の重複個所、大乘玄論と二諦義章との重複個所數例等との比較檢討によつても、これらが思想的には淨名玄論よりも進んだ展開を示していることが認められ、二論の先後は淨名玄論が先と一應は認めて然るべきかと考へる。

次に、淨名玄論と維摩經義疏。義疏卷一のいわゆる玄義段は殆ど全文といつてよい程淨名玄論の本文に一致し、また幾

つかの點で玄論を後と考へてよいものがある。そして、義疏卷一定淺深門にある「開皇之末。因於身疾。自著玄章。仁壽之終。奉命撰於文疏。辭有闕略。致二本不同。」(大正藏三八・508c)の文は、留意すべき多くの問題をはらむ。即ち(1)「玄章」とは何を指すか。これについて、①義疏の「玄義開爲四段」の内「一定淺深」には「宣癩五四之穿鑿。立一極之玄宗也。」(508c)と、他の著述に見られない極めて自信に満ちた態度で、端的に自己の教判を提示する。②他の三門の本文は、前述のように玄論と殆ど一致しかつ先行すると考へられる。③元來、淨名玄論の述作の際には、その大科に三門を分つことの意義を強調しておつた。これらのことから、「開爲四段」の定淺深門と他の三門は異時の成立で、他の三門の部分こそ「玄章」と呼ばるべきものではなからうかと疑う。(2)「文疏」とは、語意の通り隨文の釋であろう。これに維摩經略疏(續藏一一二九一二)をあてるか、「廣疏」といわれる義疏をあてるか。後述する。(3)「二本不同」は自ら上掲二疏を

指すものでなければならぬ。

(2)について。試みに義疏と天台大師智顛(538-597)の維摩經文疏とを比較してみると、かなり明瞭な一致点を見出し、^①兩疏の關連は無視しえない。文疏は晋王に献上された後、長安にあつて道莊・法論二師により講ぜられた。このことは、當時長安にあつた吉藏がその講席においてか、或はその後のある時点において、^②文疏を披見したのではないかとの推測を可能ならしめる。しかりとして「仁壽之終」に「文疏」を撰したとすれば、このおそらく文疏を披見し参照した結果に成立した義疏、とりわけてその隨文釋の段を以て「文疏」に擬することに、さほどの支障はないといえよう。

斯く推察するならば、義疏第一卷頭の「長安弘法寺沙門吉藏撰」は、上述の「玄章」と「文疏」とを合し、かつ「定淺深」を加えた最終的な説處を意味すると理解される。

さて、玄論といわゆる「玄章」の撰述の時處について。「玄章」は「開皇之末」であることは疑いえない。玄論に「陪從大尉公晋王。至長安縣芙蓉曲水日嚴精舍。」(833a)とあり。日嚴寺に止住した仁壽元年以後の撰とだけいいうる。

- 1 佐藤達玄氏「吉藏の撰述書について」(印佛研十の二)の一部で、淨名玄論の撰永時期を略説されておる。

- 2 次の通り。(カッコ内数字上段は淨名玄論―大正藏三八、下段は法華玄論―大正藏三四。)(1)「三輪之義法華玄廣明。」(864c-

- 424a~)
- (2)「昔在江南著法華玄論已略明二智。」(476b-393c~)
- (3)「法華玄中已說。」(396b-396a~)
- (4)「答法華玄論已具說之。」(899a-386b~)
- (5)「法華玄論其以詳之。」(900c-366a~)
- (6)「法華玄論雖已委釋。」(904c-375a~)
- (7)「法華玄論已略陳之。」(907b-441c~)

- 3 (上段は淨名玄論、下段は大乗玄論―大正藏四五。)(1)「二別釋二智有十一門(中略)故開十二門詳其得失。」(876b~891c-9a~83b)。宇井伯壽博士(「國譯一切經」大乗玄論解題)の指摘による。この中で、淨名玄論に十一門、大乗玄論に十二門の科を分けるが、實質に變りはなく、淨名玄論の第二釋名門を大乗玄論に第二釋名門、第三釋道門と分科。なお、大乗玄論最後の得失門第十二の段は分科十二門を標示(83a-d)するのみで、淨名玄論での詳説を豫測しての省略か。これについて、淨名玄論の第二論宗旨の内、別釋二智の十一得失門の科と、大乗玄論の二諦義の内、攝法第八の「問學佛二諦云何得失。答有十句。」の科は殆ど變りなく、大乗玄論の第三有本無本門が淨名玄論の第五・六門中の一部に重複する文を含むのみ。大乗玄論はこの第三門を除いて他は淨名玄論の取意か。(2)「問何故以二諦教(中略)然於與教未曾二於二。」(894a~c-22c~23a)。(3)「佛照有見(中略)故得世諦不說而眞諦說也。」(23c~24a)。
- 4 別の機會に詳論の豫定。
- 5 「淨名玄論」

「維摩經義疏卷第一」

(第一)

第一釋名題

釋名第二

釋立名本 略開十門

明名本

一、敦廣爲三門 凡有十句

1 維摩詰不思議解脫本 一、攝 總 爲 三

2 約 人 三 門 二、會 三 爲 二 門

三、次會 二歸 一門 三、會 二歸 一門

四、次泯 一以歸 絕門 四、泯 一句 歸 絕門

五、同 異 門(前半) 五、分 小 大 門

六、同 異 門 六、同 異 門

10 前 明 單 四 句 10 明 絕 一 假 有 (不說)

10 明 絕 一 假 有 (不說)

10 明 絕 一 假 有 (不說)

六、十

後釋本名門 (卷第二)

一、總論衆教

1 立 名 不 同 門 1 立 名 不 同 門

2 立 名 轉 不 轉 門 2 立 名 轉 不 轉 門

3 標 題 意 門 3 釋 首 題 門

4 立 名 具 義 多 少 門 4 具 義 多 少 門

5 人 法 不 同 門 5 人 法 差 別 門

二、別敘此經

1 總釋人法門(凡有十義) 1 前總論人法(凡有五義)

2 別 釋 人 門 2 次 別 釋 人 門

イ 釋 名 門 イ 初 翻 名 門

ロ 因 無 因 門 ロ 因 無 因 門

ハ 德 位 門(前半) ハ 論 德 位 門

淨名玄論について(村中)

ニ論 現 生 門

3 別釋法門 (卷第三) (次釋所說經經者凡具五義)

イ 先 釋 不 思 議 (中略)

(中略) 四、次釋不思議解脫(略有三義)

④ 四明不思議多少 1 不 思 議 解 脫 名

聞 不 聞 不 思 議 2 不 思 議 同 異 門

大 小 不 思 議 聞 不 聞 不 思 議

通 別 不 思 議 大 小 不 思 議

本 迹 不 思 議(前半) 通 別 不 思 議

內 外 不 思 議 本 迹 不 思 議

口 (中略) 內 外 不 思 議

第二論宗旨

一、總定宗旨 (卷第四) 辯宗旨第三 (前半)

二、別釋二智 (卷第五)

4 同 異 門(前半) 別釋二智 (卷第六)

5 同 異 門(後半) 釋會處第四 (卷第七)

第三論會處

一、釋會處

1 江 南 舊 釋(前半) 釋會處

2 別 釋 會 處(後半) 釋會處

5 例えは「維摩經義疏卷第一」(大正藏三八)

(1) 第十絶一假有。依玄論可明也。(913b)

(2) 舊傳云。——(中略)——淨名有子。字曰善思。甚有父風。如來授

記未來作佛。吉藏未得彼經文也。(915a)

二一九

(3)論徳位門三。——(中略)——有人言。文殊師利。本是龍種上尊佛。淨名即是金粟如來。相傳云。金粟如來出思惟三昧經。今未見本。(同上)

右を「淨名玄論」(大正藏三八)

(2)生身父母者。——(中略)——維摩有子。字曰善思。甚有父風。佛授其記。未來作佛。別有維摩子經一卷。可尋之也。(八六六a)

(3')三論徳位門。——中略——復有人釋云。淨名文殊。皆往古如來。現爲菩薩。如首楞嚴云。文殊爲龍種尊佛。發疏經云。淨名即

金粟如來。(866a・b)

7 佐藤達玄氏(前掲書)は、玄章に玄論、文疏に義疏をあてておられる。宇井伯壽博士(「國譯一切經」三論玄義解題)は、玄章に維摩經遊意、文疏に維摩經略疏をあてておられる。

8 この門の最初から「餘以夫開皇之末。……」に至る文は、玄論卷一釋名題の「説曰。夫法身元像……」(863a)と一致。

9 「問。既斥五時之教。復呵四宗之説。云何判於佛教。」(909b)に「四門之義」を以て答える。但し玄論卷七の「第三論會處凡有二門。」の内、「第一釋會處」の第四「次釋所化徒衆」に含まれる文(900a・b)と一致。

10 玄論に大段三別を立て、第三論會處に「論云。欲遍通衆教。宜具三門。一知名題。二鑿旨歸。三識分齊。」(897c)と。

11 兩疏に共通の解説の諸例。但し佛國品に限り、他品については略す。(上段は義疏、下段は文疏—續藏一—二七—五。)(1)「佛在」の「在」(919b—441右)。但し、吉藏の金剛般若疏一(大正藏三三・93b)にも同様の解説がある。本疏について宇井伯壽博士(前掲書)は大品經義疏に先つも遠からざるべしといわ

れ、江南の作に擬しておられる。管見によれば本疏の經題釋の科と大品遊意とは、十重と五重との違いはあるが相似し、ほぼ同期の作とみられる。なお関連して、大品經義疏に「開皇十五年正月二十日記」とし、同年には晋王の請により智顛に淨名疏の撰述がある点よりすれば、この解説は當時江南一般の所説とみるべきか。因みに、金剛般若疏は智顛の金剛般若經疏とも関連がある(佐藤哲英博士「天台大師の研究」)。(2)「衆」(920a—444右)。四衆について、佐藤哲英博士(前掲書三五—四—五頁)は、智顛の常用語であつたと考えられるといわれておる。金光明文句(大正藏三九・57b)も同様であるからこの考察を然りとしても、吉藏が單に智顛の常用語を書きとめておいたのかも知れないとするのみに止まらないのではないか。(3)「比丘」(920b—444左)。三義を立てる。文疏には「如智度論明」とその典據を示す。(4)「大智本行」(921b—446左)。大智を一切種智の本行を六度十地に配す。(5)「已能隨順轉不退輪」(921b—452左)。隨順に三種(但し略疏も同じ)。不退輪に文疏は四種、義疏は内の三種をとる。(6)「深信堅固」(921c—452左)信に二種。(7)「如海導師」(921a・b—451左)。以上の對照は吉藏の維摩經略疏と比較するときより明瞭となる。また、科段の類同も甚多。今は一切略す。

12 「章安尊者の長安留錫について」(天台學報第三號、拙稿参照)。

13 文疏は「慧日道場慧莊法論二師」(「國清百錄」大正藏四六・824c)によつて講ぜられ、吉藏も淨名玄論(卷五)に「慧日道場沙門胡吉藏撰」と記す。兩者とも慧日道場に止住し、後に日嚴寺に住した(唐傳九他)。